



はなのき

神坂小学校だより No.3 2024.5.22



「自分で何とかしたい」と、自力で課題解決する学び方

校長 伊藤 博章

早いもので、5月も中旬を過ぎました。連休明けには、家庭訪問へのご協力をありがとうございました。短い時間ではありましたが、この時期に学校での様子や家庭での過ごし方等について交流することができ、有意義だったと感じています。

さて、話は変わりますが、今年度は小学校の算数の教科書が大日本図書から東京書籍に変わりました。大日本図書の教科書は、他社に比べて説明が丁寧で、内容もスモールステップで構成されています。それは児童たちにとって「分かりやすい」という良さがあると言えます。しかし、丁寧な説明であるがために、児童たちの考える意欲や機会を奪っているかもしれないとも考えられます。課題に対して、「自分で何とかしよう」と道筋を考えて何とかして解決しようとする粘り強さ、つまり生きる力は育ちにいいかもしれません。

私が中学校で数学を教えていたころ、生徒たちの理解を助けようと考えて、スモールステップの授業を展開していました。式を穴埋めにしたり、ヒントカードを用意したり、文章題を読み取れるようにかみ砕いて詳しく解説したり…。その甲斐あってか、授業中の理解度は少しずつ高まり、「先生の数学は分かりやすい」と生徒たちから言われるようになりました。しかし、それに伴って、「先生、ヒントください」と深く思考する前に安易に答えを出そうとする生徒や、「この文章題の意味が分かりません」と人に解説してもらわないと問題を理解できない生徒が増えたように思いました。丁寧さに慣れてしまい、自分で何とかしようという意欲が薄れたのかもしれない。



10年ほど前に、フィンランドに2週間ほど海外研修に行ったことがあります。ご存じのように、フィンランドは学力の高さで世界トップレベルの国です。そこで驚いたのは、子供の疑問に対する大人の答え方でした。私は子供に何か聞かれると、即答で答えることが多いです。しかしフィンランドの教師や親たち大人は、本などを示しながら「ここにあるから調べてごらん」と解決の方法を示すだけです。

例えばバルタン星人の写真を見て、「父さん、これ何て怪獣？」と聞かれると、私は「それはバルタン星人だよ」と答えるだけでなく、「ウルトラマンを苦しめた宇宙忍者なんだよ」と聞かれたこと以上に答えるため、子供にとって自力で疑問解決したことにはなりません。しかし、フィンランドの子供たちは教えてもらった手段をもとに、自力で解決する経験を幼少期から積み重ねます。その学び方があたりまえのものとなっていれば、身の回りにある疑問や課題に対してそのように取り組み、学ぶ喜びや生きる力がより強く育まれていくと考えます。



教科書が改訂された今年度をよい機会ととらえ、授業の中で児童たちが課題解決のために思考したり交流したりする場面を増やし、学ぶ楽しさを高めていきたいです。